



お泉水

題字 福井大学教授 清水 英夫

№. 4 1974. 3. 31 福井県図書館協会報

福井市宝永3丁目11-16・県立図書館内 福井県図書館協会

市町村の図書館について

副会長 五十嵐 與平

昭和47年度の公立図書館統計によると、図書館の設置率は、富山県は全国第1位、石川県が第3位であるのに対し、福井県は順位では第20位であるが、設置率では全国平均に達していない。昔と違って図書館は特定の人々の施設でなくなっている現在、どの地域に住んでいても、図書館の恩恵に浴し、豊かで潤いのある文化生活を送りたいものである。

福祉施設や文化施設が手軽に利用できることは現代人みんなの願いであるように思う。

読物のなかった時代、読書に飢えていた時代から、選択に困る程図書が氾濫している上に、テレビ・ラジオの普及は読書に対する考え方を改め、図書館のイメージを変えなければならぬようになってきた。

今まで図書館といえば、閲覧室という独特の雰囲気の中で静かに落ちついて読書する楽しみがあり、一方図書を借り出して読書する場合は暇を見つけて期限に間に合わせようと努力する効果があった。又老人など一定時間に図書館通いをすることによって、身体の運動はもちろん頭脳の訓練にも役立っていた。これらの事は今も昔も変わらないとしても新しい時代に対応する利用の方法を考える時代になってきていると思う。親子連れ、待ち時間利用、宿題解き、読書会参加、現地探訪等々。

しかし図書館に出かけても「読みたい本がない、資料がない」と聞かされる時「専門書は無理ですよ」と心の

中でつぶやいてみても、何とも言いようのない淋しさを感じる。図書館協会報によると、サービス人口に対する必要図書費が挙げられているが、私の市などまだまだ程遠い現状で、その上最近では物価上昇で実質的に低下しているありさまである。

図書以外の資料を整えて地域社会に奉仕しようとするれば、収集と整理に意外に時間と労力を要し、ここでも人手不足を痛感させられる。

最近県下でも県立図書館を初め、市町村の図書館建設の機運があり、又新しい図書館の方向として配本所や移動図書館が増加していることは誠に喜ばしい。

又一部の図書館に取り入れられている点字図書室、身体障害者用の便所や階段、音楽や映画の鑑賞も出きる視聴覚室、カラフルな児童図書室、その他資料展示室、複写室、電子計算機の導入まで必要になってきた。

更に最近特に強調されている読書相談は、時代の反映か、量的にも質的にも向上してきて、なかなかむつかしい相談がふえている。この方面の仕事を円滑に進めるためには、どうしても豊富な経験と平素の研修にまつ外はない。

社会の変化に必ずや応ずるためには図書館のあり方を考え、一方市町村の文化センターとしての役割を果たすためには、新しいあり方を検討しなければならない。私は今や新しい時代に即応する図書館経営は転換期にきているように思う。

公立図書館整備費補助金の交付基準

(趣 旨)

第1条 この基準は、図書館奉仕活動の充実を図るため、市町村が図書館の整備を行うとき、その経費の一部を補助するため、必要な交付基準を示すものである。

(補助事業および条件)

第2条 補助対象事業および条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

1. 図書館法（昭和25年4月30日法律第118号）第2条第1項に規定する施設を整備する事業であること。
2. 建物の面積は、市が設置するものにあつては800㎡、町村が設置するものにあつては330㎡、以上であること。
3. 図書館には、次に掲げる施設をそなえるものとする。
 - (1) 閲覧と貸出に必要な施設
(閲覧室（児童、一般、新聞雑誌）書庫 等)
 - (2) 資料の整理および保管に必要な施設
(資料室、保管室 等)
 - (3) 集会および展示に必要な施設
(集会、展示室、ホール 等)
 - (4) 利用者の休憩に必要な施設
(ロビー 等)
 - (5) 管理に必要な施設
(事務室、管理人室 等)
4. 単年度事業であること。ただし、事業が2年以上にわたる場合は、最終年度に補助することができる。
5. 図書館には、館長、司書（これに準ずる職員を含む）、事務職員、その他の職員をおかななければならない。ただし、司書または事務職員のうち1名は専任常勤とする。
6. 図書館整備費補助は、1市町村1回とする。

(補助対象経費)

第3条 補助対象経費は、建物の本工事および附帯工事に要する経費とし、鉄筋コンクリート造りを基準とする。

2. 改築（改造を含む）の場合は基準面積にかかる事業費を補助対象経費とする。

(補助金の額)

第4条 補助金の額は、次に掲げる算式により算出した額から、国庫補助金額を控除した額以内の額とする。ただし、鉄骨造りまたは木造の場合は、補助対象経費にそれぞれ0.88、0.75を乗じた額とし、実施事業費がこれに満たないときは、実施事業費を補助対象経費とする。

(1) 新築の場合

市にあつては

補助対象経費 補助率 算出額
 $50,000千円 \times \frac{1}{3} = 17,000千円$

町村にあつては

補助対象経費 補助率 算出額
 $20,000千円 \times \frac{1}{2} = 10,000千円$

(2) 改築（改造を含む）の場合

補助対象経費 補助率 調整率
建築単価×基準面積× $\frac{1}{2}$ × $\frac{1}{10}$ か 事業費
× $\frac{\text{基準面積}}{\text{実施面積}} \times \frac{1}{2}$ の何れか低い額
ただし、1㎡当りの建築単価は、61,800円とする。

2. 市町村が直接負担しない経費（寄附金 等）がある場合は、補助対象経費から当該金額を差引いた額を補助対象経費とする。
3. 利用人口その他特別の事情により基準面積の1.5倍を超えて整備する市図書館について、知事が特に認めるときは、補助金を増額することができる。

附 則

この基準は、昭和48年度分の補助金から適用する。
(県教育庁社会教育課)

朝日町立図書館の建設計画

朝日町公民館長 笠原隆真

丹生の一隅にある人口8,300人のこの町は、最近町民に社会教育で二つのプレゼントをした。一つは総工費1億円を投じた中央公民館の建設であり、一つは町立図書館

である。

本町には、昭和36年に町出身の木下 秀氏の寄付金を基に建設した郡下最初の鉄筋コンクリートの公民館があ

り、過去10年余り社会教育のたまり場として町民に親しまれ、ここからすばらしい実践活動が生み出されて行ったが、新公民館建設によりこの貴重な建物の再利用が問題となった。町長はじめ関係者で協議の結果、知事の「公民館建設の次には図書館を」という意向と、それを受けた県社会教育課の指導を得て、1900万円で図書館に改造する案が48年9月議会に提案され議決された。

データを見ても先進国に比べると余りにも低いのがわが国の図書館の設置率である。1971年4月1日現在で、公立図書館は全国で812館に過ぎず、イギリスの分館を含めて約11,000館と比べるとGNP世界第2位という数字も色あせて見えてくる。

市の財政規模から見て図書館がつくられないような市は一つもないはずの県庁所在地にすら図書館がないところがあり、文化都市といわれる福井市ですら来年度やっと図書館建設が予算化され、県立図書館も調査費がついたところで、教育、福祉優先と政治の方向転換が図られてはいるが、図書館に陽が当たるまでの道はまだ遠いのが現状である。

その中で人口8,300人の町が、条件が整ったとはいえ図書館建設に目を向けたという事は、特筆すべき事なのかもしれない。

現在改装工事は連日着々と行われ、月末には冷暖房完備の白亜の殿堂が完成する。このように誕生する図書館をほんとうに町民のものにするための方策が、現在関係者の中で精力的に検討がおこなわれている。

○老人と子どもを大切に

何か交通安全か社会福祉の標語のようであるが、図書館は2階に121平方メートルの一般閲覧室とロビーが設けられる改装のプランの中で、一番考えたいのはいかにして気軽に利用してもらえるかということである。この為には少々過去の図書館のイメージをこわしてもよい。図書館というと黒い服の学生がしづかに本を読んでいる姿を想像しがちだが、騒がしくてもよいじゃないか!! ねころがって本を読んでもいいだろう!! それには図書館へ気軽にこられる状態の子どもと老人を大切にしようというのである。そのために騒いでもいいように一階に児童閲覧室を設けて、係員もいない自由な雰囲気でも本を読んでもらい、図書館員もなれたらここで紙芝居や映画会などもやろうと考えている。2階には20畳余りのタタミの部屋があり、ここは主に老人に利用してもらって、本を読んだり、世間話をしてもらい溜り場として、帰りには家族のために本を借りて帰ってもらおうというプランである。

たまには孫とオジジの合同読書会や、孫に本を読んでもやる日なんかが生れてくるかも知れない。

○増書はみんなの手で

図書館の利用の少ないのは、読みたい本がないからで、行きつくところは公費の図書購入費が少ないからである。

わが町も購入費までにはとても手が出ないのが現状で、といっても本がなくては図書館ではない。そこで図書寄贈運動を行っているが、図書館ができるという現実にあたたかい町民の支援が集り、現物で約1,500冊が、現金では台湾旅行を九州旅行に変更してその差額27万円を寄贈してくれた朝日町建設業会を始め、浄財が集り、どうやら図書館としてスタートできる蔵書数になった。今後共この運動は継続して1人当たり2冊ぐらゐの蔵書にしたものである。

○貴重図書は耐火書庫へ

図書館には27平方メートルの耐火書庫がある。すでに町内小・中学校のもっていた貴重図書はここで保管する事になっているが、個人のもつ古文書等の文献、町の統計資料等はここで保管して行く。

○町および郷土史関係資料の保存

本町は山岳信仰の泰澄にまつわる大谷寺、越知山、幸若舞、等県内でも文化財の多いところとして知られているが、文化財専門委員とも協力して出来る限りの郷土史の資料の保存と、町の文書、統計印刷物の保存も行って「町の事は図書館へ」が合言葉になるようにして行きたい。

○手近かに本を

本を読まないのは、手近かに本がないからである。従って「図書館は何でも貸す。しかも無料で」を町民に徹底的に宣伝する必要があるし、県立図書館をはじめ県内の図書館とも提携して貸出しをして行きたい。更に来年度は、移動公民館車が配置されるので、移動図書館を行って町民の手近かなところに本を置く作業を進める。

○好天には芝生のご利用を

図書館の横には、100平方メートルの芝生がつくられ、ベンチが置かれ、好天の気の向く折には、芝生の上で本が読めるように配慮されている。

本町の図書館は、建設が急に決定したために、「本来の図書館の在り方」を検討する時間のないままに建設が進められ、専門職員についても詳細な点は決っていないが、郡下で最初の公共図書館としての使命を考えて着実に「図書館を町民ひとりひとりのものに」をモットーにより充実したものに整備して行くつもりである。

(平面図は5ページ右下に)

図書館だより

敦賀市立図書館

本館は昭和17年、当時の奨学会から市へ移管され「敦賀市立図書館」となって以来、時代の推移につれ幾多の変遷を経たが、昭和36年1月「図書館設置条例」が制定されるに及び独立図書館としての発足を見るに至った。

従来10有余年、常に利用者の便宜を考えつつ施設設備の改修、専門職員の確保、備品の充実に重点を置き、行政の立場から鋭意努力をはらってきたが、急変する社会状況は市民生活に変動をもたらし有らゆる面で刺激が与えられ、一部では多様化の波に流され、社会を忘れ、己を忘れる処まで進んだ。勿論、生活文化に必要な「ゆとり」ある環境。とは縁遠いものになっていった。

この様な世相にかかわらず必死に食止めているのは若い少年の力であり、特に少年の読書に対する関心と熱意であると思います。

児童・生徒の図書館利用度の急上昇に鑑み、私たちもここで今一つテコ入れをすべきだと判断し、図書館法からすれば邪道かも知れないが、昭和43年から5ヶ年計画を立て児童生徒を対象とした図書の整備に重点を置き行政は勿論、一般市民にも協力を求めてきた。その結果、図書館費の倍増、特に図書購入費の急増を初めとして、巡回文庫としてのロータリー文庫、辞書、参考書を主体とするライオンズ文庫や家高文庫、高度の参考資料を整えた字野文庫等が完成し内容的に数段の充実をみ、一応所期の目的を達成することができ学校をはじめ一般利用者から大変よろこばれ、利用度も急増している現状である。

それと平行し読書グループも年々増加の傾向にあり婦人層の読書に対する関心度の向上が見られる。又児童生徒の読書感想文コンクール応募作品数も当初の349点から今年は692点にまで急増し審査員を悩ませていることは頼もしい限りである。次年度からは青年婦人を対象にしたものへと拡大してゆきたい。

◎昭和47年度の利用状況は下記の通りである。

※蔵書冊数 24,856冊

委託図書 2,573冊 原子カライブラリー 303冊

分類別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	その他
冊数	2,048	1,344	2,883	2,717	1,216	623	483	1,089	707	8,246	3,500

※図書館利用者数 22,492名

一般成人 5,891名 大学・高校生 5,970名 小・中学生 10,631名

※個人貸出冊数 16,262冊

分類別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	児童図書
冊数	75	282	444	478	308	341	137	267	76	5,185	8,378

※個人貸出利用申請者数 1,381名

一般成人 387名 大学・高校生 162名 中学生 209名 小学生 623名

※巡回文庫貸出回数 21ヶ所 88組 1,927冊

※読書会用図書貸出回数 7ヶ所 46組 690冊

上記の様に利用状況を分析した処、利用者は半径2kmを限度としている結果を得たので今年度より市内に点在する6公民館中、新装なった3地区公民館の図書室に、2,000~3,000冊程度の図書を確保し、本館よりも職員が応援し貸出及び閲覧事務を実施することにしたので、地域に於ける図書利用度が急増し地域住民によるこぼれている。今後も公民館を拠点とした巡回文庫等を検討してゆきたい。

又、今年度の新規事業の一つとして避地で女子職員によるストーリー・テーリングを実施しているが好評を博し、コンクール入賞者を出すに至っている。人形劇団等とタイアップすることにより、より効果が挙がると信ずる。

図書館活動は地道なものとの考えを一新すべく市民文化祭や社会教育展示旬間にも積極的に参加し、テーマを設定しながら図書館の現状や図書館活動の姿を市民にPRし一人でも多くの方々に図書館の動きを理解して頂くべく努力を重ねている。

市広報を利用し毎月の新着図書の紹介や全世帯へ「図書館だより」を配布して実情を紹介し読書に対する関心を深めるのを初め、昨夏訪ソした際、モスクワの国立図書館や町中の小さな図書館の一端を見聞した中で、ソ連邦では20時~21時まで開館し市民の要望に答えている姿を見て当市で現在実施中の18時閉館の線を再検討し市民の身近な施設としてゆきたい。

1日120名前後の利用者をかかえ職員は大忙しの現状であるが、明日への飛躍を考える時その疲れも忘れ常に笑顔で対応するよう努力している日々の連続である。

無心に書物と取組む真剣な姿を見るにつけ、私たち行政サイドの問題として一日も早く図書館新設の夢を実現させねばならないとの決意を新たにしている今日此頃である。

(敦賀市立図書館長 小和田 金 一)

図書館だより

北陸線の九頭竜川の鉄橋をわたるとき、円形の建物がまず目に入る。これが即ち仁愛女子短期大学である。

東には遠く白山連峰をのぞみ、南は九頭竜川をへだてて福井市街と足羽山、文珠山、そのはてには日野山もながめることが出来る、旧森田町天池の静かな景勝の地に位置する。

昭和40年4月仁愛女子短期大学は開学した。大学は当初家政科のみであったが、現在では家政学科、児童教育学科、音楽学科の3学科で学生数は約650名、その他に附属幼稚園と今年4月開園予定の保育園が隣接して設けられている。

図書館はこの仁愛女子短期大学の附属図書館として開学と同時に設置せられた。附属図書館についての解説と歴史については、短大の母体である仁愛学園の歴史とその建学の精神とを離しては語る事が出来ない。

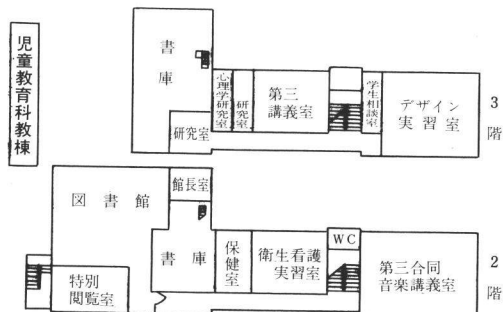
『建学の精神』は本学の学生に示される文章であるが、この間の事情をよく表現されているので次に引用しよう。

『本学園の創立者禿了教師は明治初年西欧の社会事業を視察し、わが国があらゆる面において先進諸国に追随するのを急いでその表面のみを学び、それら諸国の文化と生活の基底に流れている深い宗教的人生観には目を覆っていることを深く憂い、帰国後丁度京都同志社を卒業された長女すみ女史と共に、聖徳太子の仏教精神に基いて信念の鼓吹と女子教育の向上を畢生の業として、明治31年仁愛学園を創立された。』

上述の建学の精神はもちろん本図書館運営の基軸でもある。

聖徳太子関係図書、宗教関係図書、特に親鸞関係の図書を中心に、幼児・児童の教育関係、家政学、音楽関係の取書に特色があり、学生からもよく利用されている。

図でわかるように、図書館は、独立の建物でなく、児童教育科教棟（3号館）の2階および3階の一隅に位置



仁愛女子短期大学附属図書館

を占めている。

面積は別表のとおり全部で409.16㎡で、閲覧室、事務室、館長室および書庫も含まれている。

職員数は館長以下3名で、蔵書数は約23,000冊である。

閲覧時間は平日は午前8時30分より午後5時まで、土曜日は午前8時30分より午後1時まで。

貸出冊数は学生1人同時に2冊以内とし、その期間は2週間を越えてはならないことになっている。

館内閲覧は1人3冊以内である。

年1回新入生に対して教官および職員によって、オリエンテーションを行い、図書館の紹介、利用に関する諸手続きなどを説明する。

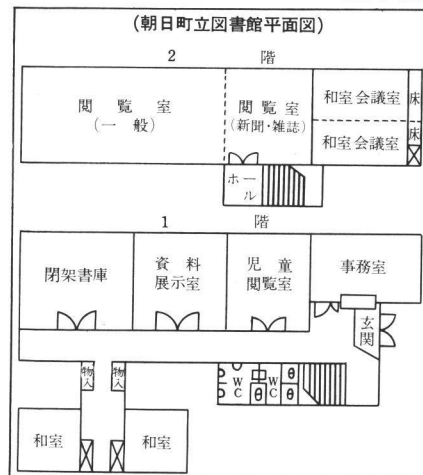
新着図書の速報を行うほか、新購入図書の書架に約1ヵ月陳列する。陳列中も貸出しは一般と同じである。

開架中の図書は参考図書、指定図書、製本雑誌、一般教養図書を入れて約6,000冊、他は書庫内及び教官研究室にあるが、図書の開架に関しては学生からもつよい要望がある。

別表

図 書 館				
図書 閲覧室	3号館	2 階	1	163.95 ^m
特別 閲覧室	〃	〃	1	45.00
館長及び司書室	〃	〃	1	21.12
書 庫	〃	〃	1	66.72
書 庫・倉 庫	〃	3 階	1	112.37
合 計			5	409.16

48.5.15現在



第17回県下読書感想文コンクール入選作

☆ 知事賞 ☆ (婦人の部)

小泉信三著 「海軍主計大尉小泉信吉」を読んで

相 木 美 智 恵 (教 員)

淡々と書かれてあれど行間に吾子への情あふれ迫り来

「海軍主計大尉小泉信吉」この書は昭和41年8月15日に第一刷がなされているからもう8年も前に世に出たことになる。この本の名を知りながら、読む機を逸していた私はたまたま同僚からそれを与えられたので読んでみた。冒頭の駄作はこの書を読んでいるうちに感じたことを思わず書き留めておいたものである。さりげなく叙事的に記録的に書かれている文章なのに、筆者小泉信三先生の親心が惻々として伝わって来て、私は幾度も涙をこぼした。「あとがき」に和木清三郎氏は次のように述べられている。

「海軍主計大尉小泉信吉」は、先生が信吉君のいとしさをおしかくしながら、なおかつ無性に抱きしめた心のかくしきれなかった文章であろう。

先生はこの一本を、悲しさにたえて書かれたのであろう。行間に涙のしたたりをさえ感ずるのである。

「あとがき」の最後の文である。私は、これを読む人誰しものが抱く感じてであろうと、わが意を得たる思いであった。

「海軍主計大尉小泉信吉」この本を読んで、まず感じたことは、現代の日本の社会に失われつつあるものの美しさが、豊かにあふれているということである。それは一言にしていうならば「人間関係の美しさ」ということになるだろうか。親子・兄妹・肉親・友人・同僚・上司等の人間関係がどれもこれも、あたたかく美しく書かれているように思った。筆者がことさらに意識されたことでないことは無論で、その奥に光り輝いているのは筆者の人格・識見だろうと考えた。他人をどのように見、どのように接していくか——この根本的姿勢においてやはり筆者の偉大な人格が作用しているのだろう。他の人格を尊重し、他人に感謝し、自分はあくまでも謙譲の心を失わないという態度が一つ一つの話にあふれ出ている。そんな感じが強く私の心に残った。

そしてまたこのことは、書かれているご子息信吉氏にもそのままといっていいほどあてはまることである。どこに在ってもつねに他を尊敬し、自分の責務を忠実に果たしていることが書簡のあちこちにも、筆者の文にも表現されている。若いながらに「よくできている人」という感じである。父子ともに円満な人ながらが髣髴と浮かんでくるのである。

私は、こうしたことから「家庭」の重要さを改めて思い知らされた。親子・兄妹・親族の情愛の深さ・こまやかさ・美しさが珠玉のように輝いており、「家庭のあたたかさ・よさ」が何ともいえないぬ香気のように紙面から立ち上ってくるような感じであった。もちろん、この一家一族は日本における知識階級の代表者ともいべき教養高い人たちであろうし、文中におけるその他の人も教養ある人たちばかりのように思える。当然すぎることもかも知れないけれど、今日、知識人階級の家庭から、あるいは、経済的にも恵まれた家庭から世間の話題を賑わす問題が出たりしていることを思えば、この筆者の家庭のすばらしさに打たれるのである。親子・夫婦・兄弟等の相剋が多くなっていること、棄て子・心中・親殺し、子殺しなど常識では考えられない事件が相次いで起こっている現在の日本の世相をみるにつけ、人間として最も大事なものが失われつつあることを嘆かわしく思うのは、私ひとりではあるまい。家庭とか家族とか、人倫などと言うと、古くさい、昔風な考え方と今の若い人は失笑するかも知れないけれど、「人間らしくある」ことが、現代において最も強く要求されているのではなからうか。そういう意味において、この書の訴えている意味を、その底に流れている心を高く評価したいし、感動を受けた次第である。

「子は人並みの死に方をしたのに、親は親らしいこととしてやらなかった悔恨に胸を噛まれた。」

「二十四年の間に凡そ人の親として享け得る限りの幸福は既に享けた。親に対し、妹に対し、なお仕残したことがあると思ってはならぬ」

人の世のまことの幸を身にあつめ

真玉と生ひし二十五の子はも

前記二つの引用文に筆者の親としての姿勢をみるし、後の短歌に一筆者の姉の信吉氏に対する挽歌—その家庭のすばらしさをみる。海を熱愛し、ユーモラスで、人に誠実、仕事に忠実な、人間性豊かな信吉氏が「真玉と生ひ」育ったことも宜なる哉である。

人と人との美しい心の絆をもてる人間、小泉信吉氏を育て上げられた筆者のこの一書を読んで、遅蒔きながら、私も自分の「家庭」の在り方を反省して今後の道標としたいと考えると同時に、このような優秀な若者や壮年の生命を奪い、多数の肉親を悲しませた「戦争」の悲惨さを改めて憎み呪ったことである。

夏目漱石著 「門」 を読んで

矢 船 美和子 (高校生)

漱石の小説を読むといつもそうだが、小説というより、何かごく自然で、ひとつひとつのそれに味のある空気のようなものを感じる。彼は「三四郎」の掲載予告で、「……ただ尋常である。摩可不思議はかけない」と書いたそうだが、いわゆる『尋常』という言葉の裏に、虚構に頼らず、自身の人間性全部を作品にうち込むような、作家としての彼の主張がかくれているような気がするのだ。しかしあくまで小説自体が虚構である以上、虚構を感じさせないというのは、あまりに精密に計算された構成であるということなのか。たとえば、複雑にはりめぐらされた伏線——それは、作者の繊細な神経を要するだろう。しかし神経質な小説は頭が痛い。伏線はやはり伏したる線なのだ。虚構に徹するが故に、虚構を感じさせない、あくまで『尋常』である漱石の作品——私は好きだ。

「門」といえば、三部作と言われる「三四郎」と「それから」を思い起こすが、その三つに、同じ題材、というか、共通したテーマがあることはわかっている、だからといって視点が一貫されるわけではない。「三四郎」ならば、それは、純朴でとまどってばかりの若い三四郎への共鳴であるし、「それから」なら、代助の偽善への批判であり、また、最後には何もかもふり切って真実を得ようとした彼への賛同であった。そして「門」では、まず、宗助とお米の生活に感じた、憧れのような気持ちだろうか……。

宗助とお米は、それぞれ友であり、夫であった安井を裏切って、一緒になった。しかし幸せになろうとしたからではないと思う。たとえ、罪の意識に苦しめられようと、自分の心に不誠実には生きられなかったのだ。それが社会的なルールをはずれていようと、だ。

だから、必然、物質的にも、精神的にも「余裕」などないだろう。ぎりぎりのところで、2人が互いにもたれ合い、いたわり合い……そんな生活に憧れを抱くなどというのは甘いかも知れないが、たとえ『一般的な幸』などないにしても、世間と離れ……文中の一部を抜き出して言えば、「生活は広さを失なふと同時に、深さを増してきた。彼等は六年の間世間に散漫な交渉を求めなかった代りに、同じ六年の歳月をかけて、互いの胸を掘り出した。彼等の命は、いつのまにか互の底に迄喰ひ入った。二人は世間から見れば依然として二人であった。けれども互から云へば道義上切り離す事の出来ない一つの有機

体になった。二人の精神を組み立てる神経系は最後の繊維に至る迄、互に抱き合って出来上っていた。」のである。私が憧れるのは、この「世間への散漫な交渉」を自己から断ち切って、なにかしら自分の信じられるもの(対象は人間なり仕事なり……)と「一つの有機体」になることなのだ。とって社会からの逃避を虚無的だとして魅力を感じるわけでは決してなく、自分の心に素直であろうとすると、邪魔するものがあれば、それが社会であろうと親であろうと、のりこえていけるだけの一途さにひかれる、ということなのである。

宗助が「罪」の意識からなんとか逃がれようと、禪を試みるところがある。結局彼は悟りどころか、何の救いもつかめずに、帰ってくるのであるが、その辺の文章にこういうのがある。「彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮ぎっていた。彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」……やはり彼は、彼らは不幸でしかないのだろうか。いつまでも開かない門の前で、じっと息をひそめているしかないのだろうか。それとも門はあくのでなくて、開けるべきなのか？

最後に、お米が春の到来を喜んでいるとき宗助は、「然し又、ちき冬になるよ。」と答える。彼は、門の前で立ちすくみ続けるであろう自分を、予想しているのだ…。

私にだって、目の前に「門」があるのかも知れない。それとも、まだそこにもたどりついていないのかも知れない。けれどその堅固な門をおそれて、ことなかれ主義に生きたいとは思わないのだ。

福井県図書館協会の歩み

昭和48年

- 6・20 理事会・総会（福井県職員会館）
 8・7 郷土資料小委員会開催（福井大学附属図書館）
 10・26 福井県本をよむ人たちの集い（共催）（武生市中央公民館）
 講演・津村節子氏「私の創作ノート」
 11・17 理事会（福井県職員会館）

昭和49年

- 1・11 第17回読書感想文県下コンクール審査委員

- 会（福井県立図書館館長室）
 1・27 第3回福井県図書館活動研究大会（福井市県民会館）
 第17回読書感想文県下コンクール表彰式
 講演・奈良本辰也氏「海舟と明治維新」
 3分科会に別れて実施
 3・11 昭和48年度県下図書館関係職員研修会（福井大学附属図書館）
 3・31 協会報第4号発行

福井県図書館協会役員名

会 長	福井県立図書館長	児 島 幸 男
副 会 長	福井大学附属図書館長	清 水 啓
	福井県学校図書館協議会長	岩 崎 達 雄
	武生市立図書館長	五 十 嵐 興 平
理 事	三国町立図書館長	徳 照 寿 天 麿
	福井市図書室主幹	林 秀 亮
	福井県立図書館副館長	印 牧 邦 雄
	三方町立図書館長	河 原 繁 太 郎
	敦賀市立図書館長	小 和 田 金 一
	小浜市立図書館長	加 納 穎 一 郎
	福井工業高等専門学校事務部長	田 中 敬 次
	今立町立花筐図書館長	市 橋 甚 助
	福井県学校図書館協議会事務局長	中 野 信 夫
	福井工業大学附属図書館長	
	農業短期大学副校長	
	福井県学校図書館協議会副会長	堀 江 二 郎
	福井県学校図書館協議会副会長	松 島 昇
	鯖江公民館長	若 泉 喜 一
監 事	大野公民館長	福 嶋 実 来
	仁愛女子短期大学附属図書館長	福 原 一 清
	福井県議会図書室 調査課長	山 本 淳 九 郎
幹 事	福井大学附属図書館 管理係長	武 内 淳 九 郎
	福井大学附属図書館 整理係長	靈 河 道 雄
	福井大学附属図書館 運用係長	平 泉 滋 祥
	福井県立図書館 総務課長	田 中 尚 雄
常任監事	福井県立図書館 振興課長	広 部 英 一
	福井県立図書館	井 口 昌 保
	福井県立図書館	出 雲 俊 樹